



## 三学期の抱負とその展開

—ひとりひとりの自主的なあそびをおって—

岡田 鈴代

### (一) はじめに

望ましい幼児の姿に一步でも近づいてくれることを願って保育をしてきたつもりですが、ひとりひとりの幼児が自主的な意欲をもって、あそびにとりくんだであろうか、自分を主張し、自分の考えを実現していこうとする幼児が、ひとりでも多くふえてきたであろうか。また、十分な愛情と環境を自然に幼児にあたえることによって、情緒的に安定した活動が展開していったであろうかと、次々と二学期の反省がでてきます。

これらの反省を少しでも実現の方向へ努力しようとして三学期を迎えました。

でも、微力な私のために、大切な幼児期を無駄にしては申しわけなく思います。とにかく真実と意欲をもって、自分なりに努力すべきであると自分にいきかせて、幼児たちの指導に取り組みたいと思います。

### (二) 三学期の展望

三学期は園内生活に落ち着きがまし、自分の能力を十分発揮することで、大いに日々の活動に楽しみが加わる時期だと思っています。

そこで、自分の学級だけの人間関係だけでなく、もっと広がって園全体の幼児と教師が一体となって、あそびに参加でき、その内容が充実していくことができればと思います。そして、そこから生まれてくる幼児の充実感や満足感が園内に充満してくるような気配

を肌を通して感じられるようになればと思っております。

そこで、多くの幼児たちが、共通の目標をもつまでに自然にあそびが発展しないものかといった、あそびの発展から指導計画を推進できればと、常に願望しております。

### (三) 展 開

ホールの日当りのよい場所に、花ごぎを敷き、(机の上よりも、家庭的な雰囲気が発展に好まれる)五、六人の幼児が、カクタとりに夢中になっている姿があちらこちらにできたり、また、アヤトリや、カンで作ったカン馬あそびをしたり、吹き矢などをゆったりした気分楽しんでるのがみられました。なんだか、人間関係が深められていることに喜びの目を見はります。

しかし、女兒と男児の間の差がみられたり、あそびの内容にかたよりが生ずることはありませんので、ある意味では、教育的意義からいって、欠陥があるかもわかりませんが、現在の段階において、持っている力を十分に發揮し、集団生活の中で明るく幼児らしい笑いがすみずみまで流れているのが感じとれます。

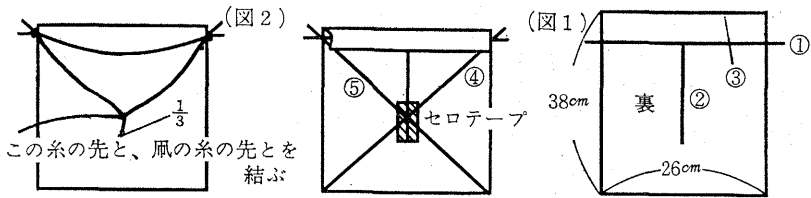
このような幼児たちを次にくる児童期にそなえて、スムーズに移行していくことができるよう配慮したいと思っております。

### (1) ひとりひとりの幼児が目的に向かってみんなて協力して、遊びを展開させたなかで

毎年、凧あげの経験をして、なかなかうまく成功しないのに、どうしたことか、今年は、凧つくりの環境設定をするに、「あー、恰好え、よしぼくも作るぞ」と二学期後半から俄然創作力に自信のできたK児ら、仲よしグループ五人は、早く作ってとばしたい衝動にかられたのか、足をバタバタさせて、「先生、ぼく作る、な、ぼく作りたい」といって、一番のりに作品に取りかかりました。

私自身も高くあがる凧を作ることによって、幼児の興味をかめようと思ひまして、「先生も百万馬力のエネルギーをだして、がんばるよ」「ぼくらも」と男児らがそばにより、凧作りのグループは、大きく部屋の中央にしてみました。

凧の紙と骨に、がんばり紙と竹ひご、木綿糸を用います。紙にマジックインクで絵を描くのですが、見本用としておいてある既製の凧を観察しては、骨のはり方の順序を自分たちで理解しようです。でも途中で少しの失敗により、なげだしたりすることがないように順序について説明をしました。



A 図(1)のように、骨①②をはり③の部分を下へ折りはります。(糊を使用)

骨④⑤をはり、糊がとれてこないようにセロテープで中心をはる。

B 図(2)のように、背糸をつける。あしは包装紙を細長く切ってつける。(一本か二本)

C やや弓なりに糸をはる。三カ所から糸をつけて先を一つにする。

そこでもCの部分が幼児らにむずかしいようです。

「どうやったん、Kくん上手にできたな」「どうするの」と聞きながら懸命に努力している丁児、「先生、そうや、片方ずつ、もちっこして、先に骨と糸をセロテープでとめるの、それからきつく糸を結んで引っぱるといいに」と、じょうずに糸を結べるようにみんなに知らせています。

しかし、細い糸を結ぶのは無理なよう

な気がしますので、興味が半減することはないかしら、またどの程度の努力をさせるのが必要なかと考えたあげく、それぞれの幼児の能力に応じて手伝うことにしました。

それにしても、このへんで一度私自身が完成させて、思い切り空高く凧をあげてみることに、少々難問題も張り切ったのりこえる幼児もでてくるのではないかと思ひまして、まず私が急ピッチで凧を作りあげました。「先生、できたわ、ああ、うれしいみんなちょっとまってね、先生あげてみたくなったから」といって園庭にとびだし思いきり走ってみました。

「わあ、あがるあがる、ものすごくあがるわ」と幼児たちの顔、仕事の手を休め窓からのそく顔々、ちようどよいお天気でしたが風のなかつたのが残念でした。それでも、やや斜上にあがった喜びはなんともいえない気分です。早く幼児たちにもわかちあたえたく部屋にもどりますと、「先生、ぼくも百万馬力で作るの」と丁児たちの声、「ぼくかて」と生き生きした声、その表情の真剣さ、ねばり強さからいまままでにない熱心な態度をみることででき胸がつまる思いがしました。

作業が終りに近づきますと、コマーシャルソングを口ずさむ幼児もみられるなど一段落になります。

それにしても、幼児たちが自発的にとりかかり、次第に熱をお

びて活発にとりくんだ原因がどこにあったのかしら。高くあがる  
風がほしい一心からでしょうか。完成した幼児が「ぼく、ちょっ  
と、とばして実験してくる」と園庭に向かってとび出していき、  
「先生、あがった」となすとげることのできた満足に、「ぼくは  
うまいんだからね」「本当ね、みんなも、もうすぐできあがるじ  
ゃない、よかったわね」と安心させました。

一日目はほとんど製作のみで終りました。「あしたは、とばせ  
るわ」「うちかて」と幼児たちは、くちぐちにいつて帰ったの  
で、明日がたのしみでした。

期待の二日目は登園してから三十分ぐらいたつと、最後の仕上  
りもでき、園庭のあちこちで空を求めてあげくらべがはじまり  
ました。風の吹いてくる方向、糸の引き方、走り方、あしのつけ  
方などいろいろ考えたり、ためしたりしながら、友だちどうし話  
し合いながら、「あんなのよくあがるな、ちょっとみせて」とい  
って友だちの作品と自分のとくらべている幼児もいたり、長い足  
をつけて喜んでる幼児があったり、自分の背たけの三―五倍位  
のところまであがるできばえでした。

しかも、案じていたよりのびのびとした気持で表現活動が展開  
され、自らの意欲の高まりによって、今まで製作活動のあまり得  
意でない幼児も参加して、自分なりにくふうもし努力もしている

などの力が發揮できたことは園全体が風作りの雰囲気に含まれて  
いました。ホールから、各部屋、園庭にいたるまで、一時は、風  
の製作活動で教師の間でも、教師と幼児の間でも、幼児と幼児の  
間でも高くあがるたびに歓声をあげて喜ぶなど和気あいあいとし  
ていたことが、ひとりひとりの幼児たちの心に快い響きとして伝  
わっていったのではないだろうか。

教師からみてCの部分は、むずかしいのではないかと心配して  
いましたが、幾度もやり直すがんばりやがいたことや、友だちど  
うし助け合って完成させるなど、成就感や満足感を得ることがで  
きました。

## (2) 幼児らどうして自主的に計画した誕生会について

誕生会など、毎月一回行なう会も幾度か経験すると、会の進行  
方法や内容のもち方などを大体理解したのでしょうか、一月の誕  
生会は「ぼくらにやらして」と希望しましたので、「わあ、本  
当、どんなことをしてくださるのかしら、楽しみにまっています  
からね」と幼児にお願いしますとともに、責任をもたせてみるこ  
とにしました。最初の挨拶から一切まかせたものの、いささか心  
配やら、楽しみやらでその日を待ちました。当日になって意外な

内容に驚くやら面白いやらで大変でした。

一部の者の偶然的な発想によってみんなが協力していった形態らしかったのですが、日頃やってみたいと思っていたことを、十分に友だちの前でできるチャンスにあたえられて、大いにハッスルしたかのようで、万才あり手品あり、(あやとりの紐で五本指に廻してかけておき、一カ所はずすと全部はずれるというのや、ストローで紙をすいあげるのやらです)サーカスあり(騎馬戦の時のように三段上までのぼる、竹馬、カン馬あるき)

その中でも落語がはじまるのは驚きました。それも、いつもは口数の少ない男児が落着いて、「毎度ばかばかしいお笑いを一席申し上げます。」と口上を述べて一同を笑わせたり、声帯模写では、目をむいてみたり、横目を使ったりして動物の鳴き声を出すなど、平素では茶目気な幼児だと思えないような幼児の中にも、案外このような面を持ち合わせていたり、くつろいだ気持になってか、恥かしがらずに張り切っているなど、幼児の内面をみることでできてとても参考になりました。

それに、リーダーの会の進行によって、さわがしくなるのではないかと思っておりましたが、それどころか、自分たちでやっているのだといった自信とともに楽しい一時を過ごしました。

リーダーを中心として、まとめてくれる場面もみられるように

なってきましたと、かえって今まで誕生会に教師の方が手をかけすぎていた面があるのではないかと思われてなりません。

もはや、幼児は大きく成長していることに気がつき、できるだけ自主的に選択する活動は幼児らにまかせておいて、望ましくない問題にぶつかったときだけいっしょに考えることにしております。その方が、とても協力的にあそびを進めることが多いように思われました。

それとともに、このように自主的に興味ある活動を経験することによって、いくらか、固定化しがちのグループも、だれでもグループが作れるようになることがわかりました。人間関係がうまくいかなければ、話し合いに分裂が生ずるといったことを幼児らなりに理解し、力のつよいグループたちだけで固定化してしまうと、だれもそのグループには参加しなくなります。また、その力のあるグループでも少人数ではあそびがおもしろく発展しないことに気がつきますので、自然にあそびの内容によっては仲間の範囲が広がることも、あそびを考えだすことがじょうずになり、幼児どうしの横との連帯性をつけて、だれでも楽しくできる姿をみることができました。

(3) 器楽合奏を成功させた喜びから性格が変わったT子につ

いつもながら、この時期ともなりますと、自然にごっこ的な活動から劇的なあそびに発展したり、知っているストーリーから創作を生かして、オペラ化させたり、いろいろな方法で劇的な表現活動が日増しに盛り上がりを見せてきます。その中でも喜々と会話が出来る幼児がいる反面、今ごろになってと思われるでしょうが、事実、口が重い方で劇あそびには興味を示す気配もなく、リーダーに誘われるままに、身体表現の蝶々とか小鳥など、動きのすくない役割に参加している程度で、心のどこかに劣等感があるようなT子もいます。

私にとっては、もっとも心を痛める幼児です。たしかに、このT子に関しては、一年間いろいろ苦労もしました。自分がいやと思っただけは手も出さず喋らなくなり、もちろん声もきかなかったのですが、最近になって、フォークダンスなどもやるし、製作活動もぼつぼつするようになってきました。しかし、しゃべることとなると、口を一文字にして力んでしまうのです。

そんな頃、器楽合奏（カッコウワルツ）の楽器分担を相談して決めていましたのですが、木琴を叩く三人を決めるのに希望者が多くなり、ジャンケンで決めることになったのです。

すると、その希望者の中にT子も参加しており、ジャンケンできめることになったのですが勝ったのです。その瞬間にうれしそうに笑って私の顔をみました。

その時、T子さんよかったね、きつと、うまくできますよと、心の中で祈りにも似た気持で微笑みをT子に返しました。

そして、一応合奏形式をとって、ピアノに合わせてみました。（木琴3、大太鼓1、タンバリン5、シンバル1、カスタ10、トライアングル3、鳥笛3）曲はカッコウなのですが大体ほとんどの幼児ができるまでになっていただけに、T子が叩くと、はっきりメロディーの違いを他の幼児たちは感づき、「先生、あわへん、あかん」という声がありました。

私は、はつと思えず、丸と三角の貼紙をT子の木琴にはつやり、丸と丸、三角と三角というように同じ形を順番に叩くよう約束しました。

すると、カッコウ、カッコウの部分だけになりますので少々まぢがっても和音になるので耳ざわりになりません。このようにして、一応皆と合わすことができたT子は、「うち、木琴叩けるわ」と帰ってお母さんに報告したそうです。

あくる日母親が喜んで園にこられ、「ゆうべは、お父さんやお兄さんに、うち木琴叩けるにと、いばつていっていた」とのよう

すを話してくれました。それを聞いて私は、T子になぜもっと早くこのようなチャンスをみのがさずにあたえられなかったのかと深く反省させられました。そして、「合奏をしてみましようか」といいますと、さっと場所につき、喜んで叩いてくれる姿には、T子の再発見ができてほっとしました。

このように、今まで集団内で少なからず満足できなかったであろうT子たちに対する助力を、最後までみのがすわけにはいかないと思いました。それ以来無口だったT子のあそびの中にも会話が入るようになってきました。

このように、自分にあたえられた役割を、自分なりに努力し果たした喜びは、大きくすべての行動の中にプラスとなって現われてきたように思いました。

その他、細かい面についての実践例もかぎりなくありますが、三学期も終りに近づきますと、一年間どの幼児にも平等に自然に惜しみなくあたえたり受けとめたであろうはずの愛情においても、また幼児の感情の受容ということにおいてもまだまだ数々の心残りのある幼児に直面する心苦しき、申しわけなきが何処にあるのです。

それでも、一応幼稚園内での活動を何とかうまくやっていったということを思うことができるまでに、幼児たちが成長してくれ

た喜びにも接することができるのです。

#### (四) おわりに

常に、幼児の成長とともにありながら、ひとりひとりについて理解を深めることのむずかしさに直面して、あらためて自分自身をみつめることとともに、幼児から学ぶことの重要性を知らされました。そこで私の心の糧として、幼稚園教育指導書をはじめ本格的ないろいろな書物を幾度も読み返しています。

幼児教育は教師と幼児の心のふれ合い、幼児対幼児のふれ合いが基盤になって展開されることだけに、お互の信頼しあった暖かな愛情の交流を支えとして、すこしでも幼児たちの経験を豊かなものにしてやることができればと願っております。

(中部幼稚園)

## 改訂 幼稚園のつくり方と 設置基準の解説

¥1,300  
〒90円

全国幼稚園施設協議会編 ■ B5判三一八頁

多年の研究成果を集約発表。旧版とくらべ、その内容は大幅に改められた。既設幼稚園の維持改善にも十分役立つ。

■発行■フレイベル館